

## 2025年度教員による授業相互参観実施状況報告書(教育開発・学習支援センターホームページ掲載内容)

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
法学部	【法律学科】昨年度および今年度着任した教員の担当科目 【政治学科】全科目 【国際政治学科】専任教員が担当する全科目	【法律学科】2科目 【政治学科】1科目 【国際政治学科】2科目	<p>【法律学科】 下記のとおり、昨年度および今年度の新任教員担当授業につき、専門分野を同じくする専任教員による相互参観を行った上で法律学科会議において報告がされ、教員間で共有が図られた。 ・「法学Ⅰ」(吉岡郁美准教授)→西田幸介教授 ・「会社法入門」(田中綾教授)→潘阿憲教授</p> <p>【政治学科】 1年生向けの「政治学入門演習」(8クラス開講)においても、「政治学入門I・II」と緊密に連携し、その講義内容を相互に参照する機会を設けている。それに 加えて、「政治学入門演習」の担当教員間で全クラスの学習成果を共有した。このことにより、特に少人数教育の教授法の理解が深まった。</p> <p>【国際政治学科】 10人の教員で構成される「国際政治への案内」において授業内容の相互参観および意見調整が行われた。各教員の専門分野と相互関連性を説明し、レジュメとスライドを教員間で共有し、互いの講義内容をつながるよう努めた。「国際政治ワークショップ」に関しては、担当教員6人が相互参観し、授業の運営方法と学生の理解度について意見を述べ合った。これらにより、各授業の独自性と相互関連性を高め、受講生のプレゼンテーションの質を向上させることができた。</p>	<p>【法律学科】 ・意見交換を通じて、学生の授業への能動的な参加などを促す手法やオンライン授業における資料の作成・展開方法の工夫等について情報共有がなされ、非常に有意義であった。授業相互参観後の意見交換を継続することが重要だと考えられる。 ・今年度の新任教員のうち残る2名の担当授業については次年度の参観実施対象とする予定である。</p> <p>【政治学科】 政治学入門演習について、相互参観をより実質化することが今後とも課題である。合同演習日を設ける等の方向で検討している。</p> <p>【国際政治学科】 複数教員が担当する科目において、各授業間の相互関連性を高めるには、相互参観および意見調整をより充実化する必要がある。受講生からのフィードバック方法も共通化を図る必要がある。</p>
文学部	哲学科:14科目 日本文学科:30科目 英文学科:6科目 史学科:4科目 地理学科:16科目 心理学科:23科目 共通科目:2科目	哲学科:0科目 日本文学科:3科目 英文学科:0科目 史学科:2科目 地理学科:2科目 心理学科:2科目 共通科目:2科目	<p>【哲学科】 相互授業参観の実施科目数は0件であったが、在学生ガイダンスの際に各哲学演習の担当教員が担当授業の紹介を行ったことが、教員相互がそれぞれの授業の内容や運営について知見を深めるよい機会となった。さらに、ゼミの受講者選抜や学科会議等の機会に、授業方法や成績評価に関する情報交換・意見交換を行うことができた。</p> <p>【日本文学科】 前日までにメールで授業担当教員に事前許可を得るとい申し込み方法をとった。講義形式の授業の場合は聴講という形で実施し、演習形式の授業の場合は討論に参加する形で実施した。演習形式の授業内では、討論の中で参観者の専門的知見が提供されることにより、受講学生のみならず、担当教員にとっても刺激となり、討論の内容も深まった。また、講義形式の授業内でも、担当教員から参観者にコメントを求める等、双方向的なやり取りを行うことで、授業の進行にメリハリがつけられ、受講学生の興味・関心を喚起する効果もたらされた。</p> <p>【英文学科】 英文学科では6科目の授業を公開したが、授業相互参観者はおらず実施科目数は0件であった。ただし、教員同士の意見交換は日頃から行われていることに加え、分野ごとのFDミーティングが実施されている。また、学科会議においても、研究倫理やFDIについてなどについて意見交換を行なっている。</p> <p>【史学科】 対面授業に参加した。授業の進め方や内容など参考になる点は多くあるが、専門分野が異なる授業の場合、得られた知見の活用においては工夫が必要である。</p> <p>【地理学科】 今年度、地理学科で2科目であった。効果として、授業内で受講学生ともディスカッションが行われたことで受講学生が刺激を受けることとなった。また、担当教員にとって参観者が受講学生に対して自分と異なるコメントを行っていたため新たな気づきが得られた。</p> <p>【心理学科】 2025年度に心理学科に着任された木村健太先生が担当された科目のうち2科目について、研究領域が近く、授業内容に関心のある教員が全回受講した。受講生の視点から授業運営、教材の作成方法、WebClass の活用方法などについて相互に意見交換を行い、双方にとって有益な機会となった。</p> <p>【共通科目】 春学期及び秋学期ともオンラインで、実施した。それぞれ外部講師を招待し、講師の話聞いて、課題に回答する方法によって実施した。</p>	<p>【哲学科】 来年度から2名の新任教員が加わることにも鑑み、授業相互参観の実施方法を含めて、授業や成績評価の方法について学科全体で検討したい。</p> <p>【日本文学科】 昨年度と比べると、公開科目数は3科目減少したが、参観が行われた科目のうちの一つでは、春・秋学期の授業がほぼ全て参観され、参観者、担当教員、受講学生の間で有益かつ濃密な討論が行われた。 一方で、公開科目の時間割が重なるなどの理由から、参観しにくい科目も見受けられた。今後は、教員の時間割の都合も考慮したうえで、参観しやすい科目により多くの教員が参観できるよう、積極的な呼びかけを行うなどの工夫をしていきたい。</p> <p>【英文学科】 引き続きFD ミーティングを開催し、分野ごとに教育に関する意見交換・教育内容の検討を行う。学科会議においても、分野を超えて共有すべき内容を議論する時間を設ける。</p> <p>【史学科】 授業や学生に関する情報を学科会議で共有し、適切に対応していくことを確認した。</p> <p>【地理学科】 多くの授業科目を開放しているにもかかわらず授業相互参観が広がっていない。実施科目を増やすことが課題である。</p> <p>【心理学科】 今回の授業参観実施については、特定の教員の自発的な意思に基づくものであり、学科として組織的に行ったものではなかった。こうした機会を実質的に継続していくためには、学科として授業参観計画を立てるなどの工夫が必要かもしれない。</p> <p>【共通科目】 開始を5時限内に収めることや、講師との打ち合わせ、遅刻のカウント、課題の時間など具体的なことについて改善の余地があるので話し合う予定である。</p>

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
経済学部	69科目(専任教員全科目)	7科目	<p>(1)実施方法 ①公開方法 経済学部専任教員は各担当科目のうち原則として1科目は授業相互参観科目とする。 ②参観方法 経済学部所属教員は、所定の期間内にあらかじめ参観申込をしたうえで授業参観することとする。 ③公開期間 2025年6月9日(月)～6月20日(金)</p> <p>(2)授業実施者へのフィードバック等 参観申込み者には、執行部まで①授業担当者に対する感想、②授業相互参観制度に関する意見・感想の提出を依頼した。①授業担当者に対する感想については、授業担当者本人にフィードバックを行った。</p>	<p>昨年に引き続き新任教員による参観を義務付けたことにより、一定数の科目を実施することができた一方で、自発的に参加する方が少ない。また、学期中の1回の授業だけでなく、学問の積み重ねとして成り立っているため継続的に授業相互参観を検討するなど、経済学部の教育力の向上を図ってきたい。</p>
社会学部	全開講科目	39科目	<p>①オムニバス型の授業での実施(1科目) 教員間で、授業の方法や内容に関する打合せを行っている。参加した教員にとって、今後の授業運営の参考となっている。 ②本学部ゲスト講師制度を利用した外部講師を招いての授業をととした実施(37科目) 外部講師を招聘し、その授業を参観するだけでなく、外部講師との意見交換を行った。授業方法や内容に関して、刺激を受けることができた。 ③専任教員担当の授業に別の専任教員をゲスト講師として招く形での実施(1科目)</p>	<p>授業相互参観を含めた教員間の交流を通して、授業の方法・内容のさらなる改善を図ることを促す。今年度は、ゲスト講師制度の利用科目は昨年度よりも増加した。オンライン上でもゲスト講師を招聘出来る事が浸透してきたため、今後も授業内容の充実化や活発な議論を増やす機会にしたい。</p>
経営学部	専任・兼任・兼任教員の全科目(オープンキャンパス模擬授業を含む)	2科目	<p>(1)実施方法 公開対象は専任・兼任・兼任教員による授業(オープンキャンパス模擬授業を含む)とし、参観期間は2025年6月2日から12月19日とした。参観者が参観を希望する授業日の1週間前までにemail等で授業担当者の許可を得る事前申し込み制とした。参観者は所定のフォーマットを用いて、授業内容の感想や参考になった点などをフィードバックとして参観後1週間以内に授業担当者に共有した。</p> <p>(2)効果等 参観者からは、自らの授業設計や運営に適用できる有用なヒントが得られたなどの積極的な指摘がなされた。</p>	<p>昨年度にない、今年度も春学期に複数回にわたる周知を行い、新任教員への参観依頼を徹底したものの、実施科目数は2件にとどまった。これには、新任教員の多くが豊富な教育経験を有する者であったために十分な動機づけを行えなかったことや、教員間で授業参観を依頼し合う場やそれを促進する環境の整備が不足していた点などが関係しているものと考えられる。今後は、長い教育経験を有する教員にも本取り組みの意義が伝わりやすいよう丁寧な周知を徹底し、対面式の教授会開催時に教員間の依頼が促進されるような働きかけをすることにより、実施件数の増加に努めたい。</p>
国際文化学部	専任教員が担当する全科目	60科目。 ただし、同一科目名で曜日・時限の異なるものは別の科目とした。	<p>本年度は、1)「対面またはオンデマンド授業の相互参観」に加え、新たに、2)「ビデオ等を用いた授業の自己チェック・相互チェック」、3)「授業に関する情報交換会・検討会」を対象とした。1)については、春・秋学期とも、参観をすすめる授業を募り、それをリストにして教授会で共有し、参観を呼びかけた(春学期22科目、秋学期20科目)。参観を受け入れた教員からは授業相互参観の有意性を示すコメントが寄せられた。 2)については、授業の映像等の自己チェックが5科目で実施された。3)については、スペイン語およびカタルーニャ関連授業に関する情報交換会が開催され、学部専任教員だけでなく兼任教員も参加し、授業担当者間で有益な情報交換がなされた。</p>	<p>1)の実施方法については、担当授業の時間割や他の業務との兼ね合いから、参観数が少ない状況が続いている。今後、この方法を継続する場合には、業務の空いた時間に参観をしやすくするような方策を検討する必要がある。</p>
人間環境学部	全科目	11科目	<p>1. 「人間環境学への招待」 この1年生の春学期に開講されている全員必修授業では、毎回それぞれ2名程度の教員が各自の専門性を踏まえた講義を行っている(今年度は専任教員のほぼ全員が登壇した)。この授業は、コーディネーター(4名)にとっても、各回登壇者にとっても、相互の授業の手法や研究アプローチを知ることができる貴重な機会となっている。</p> <p>2. 「フィールドスタディ」・「キャリアチャレンジ」 「フィールドスタディ」は16コース中4コースで、「キャリアチャレンジ」は4コース中1コースで、複数教員が企画・運営にあたった。事前・事後授業や現地訪問において、専門がちがう教員がお互いに啓発し、刺激し合う格好の機会となっている。</p> <p>3. 「人間環境セミナー」 専任教員がコーディネーターとなって、外部から講師を招きオムニバス形式で授業を行う科目である。3つのプログラムのうち、1つが複数の専任教員でコーディネーターを務めた。専任教員がファシリテートを行ったり、外部講師に質問を行ったりしたが、専門がそれぞれ異なる教員同士が1つの回の授業においても様々な観点からコメントを行うことで、お互いにとって啓発・刺激し合う貴重な機会となった。また別のプログラムでは、任期つき教員がゲストとして登壇して専門的見地から講演を行なった。</p> <p>4. 「研究会 B」の合同ゼミ 1つのテーマについて、2人の専門の異なる専任教員が合同で運営にあたった。様々な角度からのゼミ生への指摘や教員同士の討議による学生への示唆など、教育という観点のみならず、研究者同士の共同研究という観点においても、きわめて有意義であった。</p> <p>5. ゼミへのゲスト参加 1名の教員が他のゼミに出席し、コメント・講評を行った。学生にとっても、ゼミ指導教員とは異なる専門分野の研究者との交流は通常望んでもなかなか得られるものではなく、刺激的な経験であった。</p>	<p>上記3つの試みのうち、1から4はカリキュラムのなかに組み込まれているが、5. は教員の自発的なイニシアティブに基づくものである。この試みは、学生たちから好評を博しているとともに、参加教員にとっても視点を相対化し視野を拡大することができる機会である。こうした単なる「参観」の枠を越えた各種の教員同士の研究交流・合同授業の場を今後も用意していきたい。</p>

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
現代福祉学部	本学部専任教員の担当科目(ただし、演習・実習科目、情報・調査系科目、言語コミュニケーション科目、その他、担当教員が公開を希望しない科目を除く)	6科目	<p>【実施方法】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 参観方法 参観希望者は、参観希望の授業担当者に個別で連絡を取り、指定された日時の授業相互参観を実施している。</li> <li>2. 公開期間 2025年5月19日～2026年1月19日</li> </ol> <p>【得られた効果】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ゲストスピーカーを招く授業回への参観により、地域文化の資料を読み解くだけではなく、地域の方をお招きした対話形式で授業が展開されており、学習から研究につながる「姿勢」を学ぶことができた。また、ゲストスピーカーをお招きする時期についても参考になった。</li> <li>・学習支援システム内に掲載されている講義資料を元に授業が展開されており、PCで確認したり、手元資料を持参したりするなど、学生の授業スタイルはそれぞれに合わせた形で展開されていた、PPT資料も写真が多用されていること、教科書の該当ページの記載などがなされ、受講生を話に引き込む内容であることが参考になった。</li> <li>・学習支援システムに講義資料をアップし、ペーパーレスにも貢献している様子が分かった。リアクションペーパーの読み上げ、学生の身近な事例を通じた理論の学習を進めており、学びの深度を図る様子が理解できた。</li> <li>・他学部生を含む多人数の講義であり、授業開始の導入においては、前回の内容の振り返りを通じ、受講学生の記憶を喚起する工夫がなされていた。ゲストスピーカーを通じて、学生自身がこれから地域にどのように関わっていけるかの工夫がなされている授業であり、参考になった。</li> <li>・通常はハード中心の地域計画が論じられることが多いなかで、社会教育と社会福祉の切り口から授業を構成することで福祉領域の学生にも響くよう工夫されていることやゲストレクチャーの途中で動画を視聴させることにより、学生の理解度向上の工夫がなされ、参考になった。</li> </ul> <p>※授業相互参観によって得られる効果は多く、授業の実施方法などについて点検を行う貴重な機会となっている。</p>	授業参観の内容を教授会やFD等で引き続き共有を行い、課題を精査していくことと務めていく。
情報科学部	全科目	2科目	<p>本年度も昨年度と同様、今まで授業相互参観の対象となることが少なかったスプリングセッションやオータムセッション、夏季休業期間や春季休業期間に開講される集中講義の授業相互参観を実施した。特に、情報科学部で実施している「リクエスト集中講義」と呼ばれる学生のリクエストによって毎年開講科目を決定する講義の教育効果を確認するため「映像制作基礎演習」と「Node.js/Javascript入門」の二つの講義に着目した。「映像制作基礎演習」は数年連続で開講されているリクエスト集中講義であり、昨年度も授業相互参観を行っている。履修者の違いによる授業実施の方法等を参考にするために本年度も参観の対象科目とした。</p> <p>「Node.js/Javascript 入門」は今年度初めて開講する科目であり、学生が初めて触れるプログラミング言語やその開発環境をどのように理解させるかを参考にするため参観の対象科目とした。</p>	情報科学部では、2026年度に新たに設計したカリキュラムに基づき授業を実施する予定である。新カリキュラムに基づく授業が実施される1年生の授業を中心に、新カリキュラムの教育方針やその効果に関し、授業相互参観を通して確認していくことが課題となる。
キャリアデザイン学部	専任教員が担当する学部専門科目全科目	4科目(参観回数4)	<p>【実施方法】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①FDミーティング(年3回) 4月・9月・2月に年間3回実施している。対象は、基礎ゼミ、基幹科目のうち「入門」の付く科目、「キャリア研究調査法」(質的調査・量的調査)、体験型の選択必修科目である。FDミーティングに先立ち、各科目の担当者間で授業内の取組や課題を共有し、改善に向けた協議を行っている。複数開講科目では、担当者間でシラバス内容も相互確認し、授業運営や学生の学修状況の共有を行っている。</li> <li>②相互授業参観 専任教員の担当科目のうち3科目を教授会で選定し、公開日に教員が参観する形式で実施した。参観後、参観者がフィードバックコメントを提示し、授業上の工夫を学部全体で共有している。</li> <li>③ゼミ活動への教員参加(授業外の相互参観的取組) 学生が主体となって実施した映画上映会・ワークショップ型プログラムに、当該ゼミ担当者以外の専任教員1名が参加し、上映後のワークショップで学生の運営・進行等に対するフィードバックも行われた。本取組は昨年度から継続しており、今年度で2年目となる。</li> </ol> <p>【効果・得られた成果】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①授業改善の組織的な循環が形成された 事前の担当者間協議→FDミーティングでの学部共有という流れにより、各科目の課題や工夫が可視化され、個々の教員の授業改善に活用されている。また、シラバス内容や授業進行、学生の学修態度・修得状況を担当者間で共有することで、授業実践の質をそろえ、よりよい改善につなげる基盤となっている。</li> <li>②参観を通じて、具体的な授業技法が学部内に共有された 相互授業参観のフィードバックにより、授業の流れの可視化(目的・構成の提示)、振り返りから次回への接続を意識した授業設計、条件付き立場表明(Yes, but/No, but)を認める問いの設定など、実践的な工夫が学部全体で共有されている。</li> <li>③学生主体の学びの場に教員が関与し、学習支援と省察が促進された ゼミ活動への教員参加により、学生の企画・運営に対する具体的なフィードバックが行われ、学生主体の取組の質向上と振り返りの機会につながっている。継続実施(2年目)である点も、取組の定着を示している。</li> </ol>	次年度も引き続きFDミーティングと直接の相互授業参観とを併用する。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
デザイン工学部	建築学科:17科目 都市環境デザイン工 学科:15科目 システムデザイン学 科:5科目	建築学科:17科目 都市環境デザイン工学 科:15科目 システムデザイン学 科:5科目	<p>学期末に実施している演習科目の最終講評会について、他学科の専任教員も参加可能とする学科横断型の講評会として展開する取り組みを本格的に開始した。あわせて、年度末の教授会において、その運営過程で得られた知見や課題を共有し、教員間で意見交換を行った。</p> <p>・建築学科 建築学科では、1年次から4年次までのスタジオ科目を中心に、図形技術、フィールドワーク、ビルディングワークショップ、卒業研究、卒業制作に至るまで、全クラス合同による講評会を実施している。これにより、兼任教員を含む教員相互が他科目・他クラスの教育内容を把握し、横断的に議論できる体制を整えている。</p> <p>また、公開講評会を随時開催し、学習成果を学内外に広く公開するとともに、外部からの意見・評価を受ける機会を確保している。さらに、デザインスタジオ、フィールドワーク、卒業制作の優秀作品および卒業研究梗概を、学科発行誌『スタジオワークス』『建築研究』に掲載し、成果の共有と可視化を図っている。</p> <p>・都市環境デザイン工学科 1年次から3年次までの実習系科目において、学科専任教員・兼任教員・教育技術嘱託に加え、他学科専任教員も参加可能な全体講評会を開催している。学生への講評を通じて、授業内容や指導方法についても教員間で議論できる場を形成している。</p> <p>また、卒業論文については全専任教員による審査体制をとり、研究内容を学科内で共有するとともに、審査過程を通じて活発な意見交換を行っている。</p> <p>・システムデザイン学科 PBL型必修科目を軸として、全専任教員が参加する相互参観体制のもとで学生指導を実施した。学生は課題の調査から解決策の企画立案までを行い、企画発表・中間発表・試作・最終成果発表の各段階において、全教員から多角的なフィードバックを受ける機会を設けている。</p> <p>本年度はすべて対面で実施し、学生の成果物に対する講評を通じて教員間の意見交換および相互確認を行った。授業内ではプレゼンテーションおよびパネル展示を行い、実際の試作品の動作確認を含めながら、教員間での情報共有とコミュニケーションを図った。</p> <p>このような共同指導および相互参観の仕組みにより、学生の進捗状況を教員全体で把握し、制作過程で生じる課題や質問についても共有することで、より適切かつ一貫性のある助言・指導を行うことができた。</p>	学科横断型講評会への教員参加を一層促進し、学科間の交流をさらに活性化させる。
理工学部	機械3,電気3,応情5, 経シ3,創生4	機械3,電気3,応情5, 経シ3,創生4	学科ごとに、カリキュラム上、特に重要な科目、新任の先生の科目、兼任の先生の科目などを含め、授業参観を行った。これらの内容は学科会議で共有され、教員間で意見交換を行いながら、より良い授業運営に向けた議論を進めることができた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業相互参観の実施率向上を図る。</li> <li>・兼任講師を含めた全授業での授業相互参観を継続的に実施し、専任教員との連携を強化する。</li> <li>・学科ごとの実施科目数のばらつきの解消を図るとともに、報告書の情報共有の在り方を検討する。</li> <li>・有意義な情報共有を実現するため、報告書フォーマットの見直しを行う。</li> </ul>
生命科学部	春学期:95 秋学期:87	春学期:11 (参観者数16人) 秋学期:5 (参観者数7人)	春学期(6/2～6/28)と秋学期(11/10～12/6)の2回(ともに24日間)授業公開を実施した。公開科目数は例年と同程度の科目が公開された(2023年度:179科目、2024年度:182科目、2025年度:182科目)。参観後に行う授業参観者アンケートでは、「復習を兼ねた演習による知識の定着法が参考になった」などの肯定的な意見が多く見られ、参観制度が有効に利用されていると感じた。	参観者からは有益であったとの意見があった一方で、参観者数が少なく、制度が幅広く利用されていない点が課題である。積極的な参加を促すとともに、手続きの簡素化や短時間参観など、教員の負担軽減を図る形式について検討していく。
グローバル 教養学部	全科目	2科目	GISにおいては、経験豊富な非常勤講師が多く在籍しており、標準的な教育の質が概ね維持されている。その一方で、2025年度よりGISで初めて授業を担当する非常勤講師が2名在籍していたため、教育の質保証および円滑な授業運営を目的として、その2名に対して経験豊富な専任教員による授業参観を実施した(春学期1科目、秋学期1科目)。参観結果については、FD活動の一環として、参観を行った専任教員から教授会メンバーに共有され、GISの特徴であるインタラクティブな授業を通じて学生の主体的な学びを促す教育アプローチが適切に実践されていることが確認された。あわせて、当該授業から得られた知見についても共有が行われた。さらに、非常勤講師に限らず、専任教員を含む授業全体における教育の質の在り方について、活発な意見交換が行われた。	実施科目数の増加を目指す。
スポーツ 健康学部	308科目	13科目	昨年度8件と比べて今年度は13件に増加した。すべて学外から招聘した講師に関する報告であったが、授業方法や学生への接し方などにおいて、新たな発見があったと報告している。	次年度において、専任教員間での参観も含めさらに相互参観数が増えるよう促していくことが必要であろう。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
市ヶ谷リベラル アーツセンター	全科目	11科目	<p><b>【全体概要】</b>  2025年度に実施された授業相互参観(計6科目)ならびに教員相互情報交換会の内訳は、下記の通り。  授業相互参観(従来型):0科目  授業参観による研修(新任教員対象):2科目  セルフ授業参観(録画記録によるセルフレビュー型):4科目  教員相互情報交換会:5件  (今年度は、社会科学分科会からの報告はなかった)  今年度の活動を通じて、生成AIへの対応が複数の分科会で共通の課題として取り上げられたほか、学習支援システムの運用上の課題や、授業改善に向けた教員間の情報共有の重要性が認識された。セルフ授業参観においては具体的な改善点の抽出に至った事例が複数みられ、情報交換会においても生成AI対応や評価方法の工夫など実質的な議論が行われた。件数の多寡にとどまらず、各活動が授業改善や課題認識の共有に実質的に寄与したかどうかという観点からは、一定の成果が認められる。</p> <p><b>【実施方法や効果等について】</b>  ①授業参観による研修(新任教員対象)  2科目で実施された。  そのうち「English3-Ⅱ」では、2025年度着任の先生に、参観する側・される側の双方の立場を経験いただいた。とくに項目は設けず、授業運営全体を参観対象とした。参観者からは、以下のような所感が寄せられた。  ・川端康成の作品を教材として使用されていた点に文学的価値と教育的配慮を感じ、大変印象深く拝見した。また、学生による和訳に対して丁寧に指導されており、日本語表現についても学ぶ機会となった。(教員①)  ・前回授業内容を復習する小テストを実施し、授業時間外学習への配慮および各回の授業の連携が意識されていた。また、学生に英語による問いかけを継続的に行い、学生が主体的に課題に向き合う状態を効果的に作り上げていた。(教員②)</p> <p>②セルフ授業参観(録画記録によるセルフレビュー型)  「情報処理演習Ⅰ」「スポーツ総合演習」ほか計4科目で実施された。  「情報処理演習Ⅰ」では、Wordを用いたチラシ作成授業をセルフ参観した。  授業は概ね順調に進行し、出席者全員が目的物を作成・提出できたことが確認された。一方で、描画機能など重要項目について、履修者が十分に習得できたかどうかという点が課題として認識された。今後、類似内容を追加実施するかどうか、シラバスの見直しも含め検討する予定である。</p> <p>「スポーツ総合演習」では、授業動画を通じて授業構成および資料提示方法を振り返った。  ・画像を多く使い、文字数を抑えたスライド構成により理解しやすい内容であった。  ・学生の文脈に沿った事例を踏まえた説明やクイズ形式の問いかけにより、集中力を維持しながら学習できる工夫がなされていた。  ・生活習慣全般に関する内容をデータに基づき論理的に説明し、若年層の学生に健康問題への自覚を促す示唆に富む授業であった。  一方、動画記録ではスライドショー形式が使用されていなかったため、レーザーポインターの活用等により、さらに視認性を高められる可能性があるとの振り返りがなされた。  セルフ授業参観は、自身の授業運営を客観的に振り返る機会として有効であり、今後も継続的な実施を促したい。</p> <p>③教員相互情報交換会  人文科学、自然科学、英語、諸語(スペイン語部会)、保健体育の各分科会等において、対面4回、オンライン1回、計5回実施された。</p> <p>[人文科学分科会]  新しい学習支援システムの操作性に関する課題が多数共有され、学生・教員双方の意見収集を求める声があった。また、生成AI利用への対応として、授業内パスワードの記載を必須とするリアクションペーパー運用や、生成AI作成文を教材として提示する工夫などが紹介された。抽選制の在り方や教室設備(プロジェクタ、空調)に関する課題も共有された。</p> <p>[自然科学分科会]  履修者数の推移や受講態度、授業参加状況について報告がなされた。生成AIの普及を踏まえ、レポート課題や対面試験の活用、評価方法の工夫について意見交換を行い、授業改善に向けた示唆を得た。</p> <p>[英語分科会(オンライン開催)]  全体会にて授業開始時の確認事項、2025年度の留意点(生成AI利用、合理的配慮、ハラスメント防止等)を共有した。ブレイクアウトセッションでは、技能別テーマごとに授業運営やAI対応について情報交換を行い、最後に全体共有を実施した。使用資料は後日教員へ共有された。</p> <p>[諸語分科会(スペイン語部会)]  6年ぶりの開催となり、コロナ禍以降の授業状況を総括的に振り返った。各教員の授業運営や成績評価の工夫・課題を共有するとともに、今後のスペイン語教育の在り方について意見交換を行った。</p> <p>[保健体育分科会]  専任・兼任教員による講師会を開催し、自己紹介の後、授業上の課題や工夫について共有した。教員間の情報交換と連携強化の機会となった。</p>	<p>授業参観および教員相互情報交換会の総数(合計11)は、昨年度(合計16)から減少した。授業相互参観(従来型)を選択する分科会は今年度もなかった。各教員による後シラバスなどILAC独自の取り組みとの関係も含めて、「教員による授業相互参観」の各実施形態の効果を検証しつつ、各分科会による次年度以降の実施方針の検討、選択を支援していく。</p> <p>参観および情報交換会の成果を分科会間で共有するなど、個別の振り返りを組織的な改善へとつなげる取り組みを現実化することは引き続きの課題である。その課題への対応の中で、次年度以降は全ての分科会で「教員による授業相互参観」が実施される環境づくりに努めたい。</p>

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
小金井リベラル アーツセンター	原則として全科目 (ただし担当教員が公 開を希望しない科目 を除く)	11科目	今年度も従来同様、参観期間は限定せず、春・秋学期の授業実施期間中いつでも、関係教員の関心と都合に応じて参観が実施できるようにした。参観の可否や日時などは分科会単位で事前調整し、参観は対面でもオンラインでも構わないこととした。参観した教員は、指定の報告書を記入し各分科会単位でとりまとめ、運営委員会で情報共有を行った。 参観した教員は参観した授業から多くの学びを得ており、自分の授業の改善にも役立っている。	授業相互参観を通じて得た知見を、参観した教員・参観を受けた教員以外の教員とも共有し、授業実施にいつそう生かしていけるようにしたい。分科会の垣根をまたいだ参観をより行いやすいものにしていく。
SSI(スポーツ・サイエンス・インスティテュート)	61科目	1科目	1. 対象授業 スポーツ学入門(春学期開講科目) ・2024年度の新カリキュラム開始時よりSSIの必修科目として開講したオンデマンド形式の授業である。  2. 参観方法 ・第3回(「ハラスメント:コンプライアンス、ハラスメントの定義、被害の相談方法」UNIVAS担当講義)の授業を参観した。  3. 授業効果等 ・大学の体育会活動において起こりうる体罰やハラスメントについて、具体例を通して解説されており、SSI生が体罰やハラスメントを防ぐ重要性を理解するとともに、体罰やハラスメントはなぜあってはならないのか、またどうすれば体罰やハラスメントを防ぐことができるのかなどについて検討することを目的とした授業が展開されていた。  4. 総括 ・参観した授業は、SSIの導入科目に適した授業内容を提供していたと考えられる。	・今後は授業改善アンケートや学生モニター制度などの活用を通して、特に新カリキュラム開始にあたり新規に開講したSSI科目に対する満足度などについて具体的な意見を収集する必要がある。